現代朝鮮語のモーダルな分析的形式についての基礎的研究*

高地朋成
又松大学校

1. はじめに

本稿は現代朝鮮語(以下，「朝鮮語」)におけるモダリティー(modality)を扱う研究の一部であり，いわゆる分析的形式(analytic forms)に焦点を当てるものである．最近，朝鮮語のモダリティーを扱った研究が積極的に発表されている．これは，近年の類型論研究(Bybee et al.(1994)，Palmer(2001)，de Haan(2005)等)が少からぬ影響を与えたものと考えられる．類型論研究においてモダリティーは汎言語的に(cross-linguistically)設定が可能な文法範疇(grammatical categories)の１つと見なされており，このような考え方は박재연(2006)をはじめとした若手韓国人言語学者による研究に受け入れられている．장경희(1985)の見解を発展させた박재연(2006)によって，朝鮮語の先語末語尾(pre-final endings)および一部の終結語尾(final endings)によるモダリティーの体系が，ある程度明らかにされた．現段階において韓国では박재연(2006)が，朝鮮語のモダリティー論の標準的な見解であると言い得る．朝鮮語のモダリティー論の発展に貢献した박재연(2006)ではあるが，細部においては多くの問題を孕んでいる．「モダリティー」と「ムード(mood)」といった用語の使用や認識的モダリティー(epistemic modality)と証拠性(evidentiality)の境界の設定に関する問題においてはまだまだ議論の余地があり，妥当性の高い見解の発表が待ち望まれている．また朝鮮語に数多く存在するモーダルな分析的形式(modal analytic forms)についての記述，意味的に類似したモーダルな分析的形式間の弁別性についての記述，モーダルな分析的形式間の結合現象についての記述が，不十分もしくはほとんど無い．また，当該の形式をモダリティーと見なすための判定基準についても積極的な議論がなされていないというのが現状である．朝鮮語のモダリティーの大枠に関しては先行研究でも活発に議論されて来たが，細かい部分についてはまだ解明されていない．細かい部分にこそ朝鮮語の特徴が秘められていると考えられるため，ここに焦点を当てた研究が必要である．

本稿は，これまであまり焦点が当てられていなかったモーダルな分析的形式を対象とした考察を今後進めるための基礎的研究である．まず第2節において，モダリティーに関連する用語使用の問題，理論的枠組み，

証拠性の文法形式，モダリティーの程度性(degrees of modality)について本稿の見解を示したいと思う．次に第3節では本稿での研究対象である各分析的形式の統辞的および意味的特長について整理したものを提示し，最後に第4節では本稿での考察結果の要約および今後の課題について言及する．

本稿は実際の言語資料に基づいた考察を行うため，韓国国内で刊行された小説，随筆，新聞，ドラマシナリオ等から収集した例文や韓国の国立国語院(국립국어원)が開発したコーパスである21世紀世宗計画(21세기 세종계획)から得た例文を根拠に議論を展開することを原則とする．但し，適切な例文が見つからなかった場合に限り，朝鮮語インフォーマントの協力の下に作成した用例を提示することにする．例文の右端にある＜　＞には出典を示すが，当該の例文が作例したものである場合は何も表記しない．

2. モダリティーに関連する基本的議論

以下において朝鮮語のモダリティー研究において議論すべき緒項目について概観する．2.1では用語の問題，2.2では概念的モダリティーの枠組み，2.3では証拠性の文法形式，2.4ではモダリティーの程度性について言及する．

2.1. 用語の問題

朝鮮語のモダリティー研究において重大な問題の1つは「ムード(mood, 서법)」および「モダリティー(modality, 양태)」という用語の使用に関し，研究者間の合意が得られていないことである．以下では，先行研究においてこれらの用語がどのように使用されているのかについて概観することにする．

고영근(1986, 2007)では，モダリティーをテンポラリティー(temporality)，アスペクチュアリティー(aspectuality)と同等の関係を成す意味論範疇(semantic categories)の1つとして捉え，ムードをテンス(tense)およびアスペクト(aspect)のように文法範疇の1つとして設定している．屈折性の強い言語に確認されるムードが，朝鮮語の文法体系にも確認できるという主張の下，先語末語尾の体系をムードと見なしているのが特徴的である．고영근(1986, 2007)では，モダリティーとは例えば副詞の‘아마도(たぶん，おそらく)’の語彙的意味，分析的形式の‘Ⅱ·

ㄹ 것이-'の表す意味等が統合される意味範疇として扱われている．すなわち，モダリティーという用語を「ムードのようなもの」という意味で使用しているのである．

고영근(1986, 2007)と同様の見解は윤석민(2000)でも確認することが出来る．윤석민(2000)では，ムードを「話し手の心理的態度と関連した意味領域が，動詞の活用形(先語末語尾によるもの)により具現化される文法範疇」と定義している．一方，モダリティーについては，「ムードで表される話し手の態度と関連した意味領域は勿論，語彙や語順，語調等によっても確認出来る意味領域」と定義し，名詞や副詞等の語彙範疇，終結語尾の体系，補助用言等によって表されると見なしている．

서정수(1986)では，モダリティーという用語は使用せず，ムードを聞き手に対する話し手の心理的態度を表す文末ムード(문말 서법)と文の内容に対する話し手の心理的態度を表す先行文末ムード(선행 문말 서법)の2種類に区別している．文末に現れる終結語尾の体系をムードと捉えている点で，서정수(1986)の見解は고영근(1986, 2007)のものと大きく異なる立場にある．

장경희(1995)では，ムードという用語が表す範疇的範囲に関する見解が研究者によって異なるという点を問題視し，ムードという用語を使用せずに，モダリティーという用語を積極的に使用している．장경희(1995)では，モダリティーは命題(proposition)に対する態度を表す文法範疇で，'Ⅰ-겠-'，'Ⅰ-더-'，'Ⅰ-네'，'Ⅰ-구나'等のいわゆるモーダルマーカー(양태소: modal markers)によって表されるものであり，終結語尾の体系である文体法(문체법: sentence type)とは異なるという点を強調している．

조일영(1995)では，モダリティーを広範囲において実現される文脈的，語彙的，文法的現象として捉えている．조일영(1995)の言う「文法的モダリティー」に限定して論じた場合，これは認識的モダリティーと表現的モダリティー(표현적 양태)に区分される．認識的モダリティーは，事態に対する認識を示す'Ⅲ-ㅆ-'，'Ⅰ-느-'，'Ⅰ-겠-'，'Ⅰ-더-'等の先語末語尾によって表され，表現的モダリティーは'Ⅰ-습-'，'Ⅰ-니-'等の待遇法的機能を持った先語末語尾や'Ⅰ-다'，'Ⅰ-냐'，'Ⅰ-자'，'Ⅲ-라'等の終結語尾によって表されるものであると言う．조일영(1995)では終結語尾で表される表現的モダリティーをムードと呼んでいるが，このような立場は先に言及した고영근(1986, 2007)と相反するものである．

外国人研究者の視点から朝鮮語のモダリティーについて論じたWymann(1996)は，モダリティーの概念を文法的に表す方式にはムードとモーダルな表現(modal expressions)があると主張している．Wymann(1996)では，モダリティーを汎言語的に確認できる文法範疇と

し，命題に対する話し手の態度を表すものと見なしている．終結語尾の体系をムードと見なし，‘Ⅱ-ㄹ 것이-’や‘Ⅱ-ㄹ 것 같-’等の分析的形式や‘허락(許諾)’や‘금지(禁止)’等の語彙をモダリティー表現と見なしているのが特徴的である．終結語尾をムードと見なす立場は，先に紹介した서정수(1986)および조일영(1995)の見解と同様である．

박재연(2006)は，用語の使用において，意味論範疇としてのモダリティーと文法範疇としてのモダリティーを区別しない立場を取っている．박재연(2006)では，朝鮮語のモダリティー範疇を「話し手の主観的態度が文法化した形式によって表されるもの」と捉えており，先語末語尾の‘Ⅰ-겠-’や‘Ⅰ-더-’等，そして終結語尾の‘Ⅰ-네’や‘Ⅰ-구나’等をモーダルマーカーと捉えている．このような見解は，장경희(1995)のものと同様である．

임동훈(2008)は，モダリティーを命題の事実性と実現性に対する話し手の態度が表現された概念的範疇と見なしている。임동훈(2008)では，概念範疇としてのモダリティーが用言の屈折形態として表され，尚且つ，発話内行為(illocutionary act)と関連したり，もしくは必須性が伴う場合に限りムードの用語を使用し，非屈折形態によって表されたり，屈折形態として表されるものであっても発話内行為と無関係であり，必須性を伴わない場合は文法的モダリティー(grammatical modality)の用語を使用している．この見解によると，終結語尾によって表される直説法，命令法，勧誘法，推測法等の対立，連体形語尾‘Ⅱ-ㄴ’と‘Ⅱ-ㄹ’の対立，名詞形語尾‘Ⅱ-ㅁ’と‘Ⅰ-기’の対立がムードに該当し，先語末語尾の‘Ⅰ-겠-’や‘Ⅰ-더-’等，そして終結語尾の‘Ⅰ-네’や‘Ⅰ-구나’等，分析的形式の‘Ⅱ-ㄹ 것이-’や‘Ⅱ-ㄹ 것 같-’等は文法的モダリティーに該当する．

上記のように，研究者ごとにモダリティー範疇の設定および用語の使用における違いが存在する。元来，ムードとは屈折性の強い言語を対象とした研究において設定され得る文法範疇であるのに対し，モダリティーは主に英語の法助動詞(modal auxiliary verbs)を記述するため導入された意味論範疇の概念であった(Kearns 2000: 52-61)．しかしながら，最近では，Wymann(1996)，Bybee et al.(1994)，Palmer(2001)等で汎言語的に設定可能な文法範疇として見なされるようになっている．

これまでの用語使用の流れを整理すれば，以下の【表1】のとおりである．ここで重要なのは，ムードとモダリティーという用語について望ましい使用方案を提示することではなく，用語の使用に関する現状を把握し，混乱が生じないよう各用語を区別して使用するよう努めることであると思われる．以下の【表1】が示すとおり，朝鮮語の関連学界ではモダリティーという用語を2つの用途で使用している．便宜上，話し手の主観的態度と関連した意味領域を「モダリティー$_1$」と呼び，いわゆ

るモーダルマーカーによる文法範疇を「モダリティー$_2$」と呼ぶことにする．モダリティー$_1$の場合はムードとの関連性を見出すことができるが，モダリティー$_2$の場合は，ムードの代わりに使用される用語であるため関連性が見出せない．モダリティー$_1$とモダリティー$_2$がそれぞれ意味する内容には相当の違いがあるにもかかわらず，両者共にモダリティーという用語を使用するため混乱が生じるのである．이선웅(2012)では，モダリティー$_1$に該当するものを「様相(양상)」という用語で表すことで「モダリティー」との区別を試みているが，「様相(モダリティー$_1$)」と「モダリティー(モダリティー$_2$)」がいずれも'modality'の翻訳語であるという問題を抱えていることに変わりは無い．

【表1】用語使用の実態

用語	定義	先行研究
ムード (mood)	'mood'に対する翻訳語 話し手の主観的態度が用言の活用体系によって表されるもの (※ムードの実現方式に関する見解は研究者によって異なる)	고영근(1986，2007) 서정수(1986) 조일영(1995) Wymann(1996) 윤석민(2000) 임동훈(2008)
モダリティー$_1$ (modality$_1$)	'modality'に対する翻訳語 「'mood'的なもの」を意味し，話し手の態度を包括する意味領域のことである (※ムード，分析的形式，副詞等の多様な言語的手段によって表される意味が統合される範疇)	고영근(1986，2007) 윤석민(2000)
モダリティー$_2$ (modality$_2$)	類型論研究において主張された汎言語的な文法範疇としての'modality'に対する翻訳語 (※いわゆるモーダルマーカーによって成り立つ文法範疇)	장경희(1995) 박재연(2006)

用語の使用問題に関する議論は，今後も継続するものと予想されるが，現段階での(韓国における)趨勢では，話し手の主観的態度を表すために用いられるモーダルマーカー(すなわち先語末語尾および一部の終結語尾)による文法範疇を「モダリティー」と呼ぶ立場が一般化しつつある．고영근(1986，2007)では「ムード」を意味範疇である「モダリティー

(モダリティー$_1$)」に対応する文法範疇として規定しているが，既に이선웅(2012: 378)で言及されているように，最近の議論では「ムード」という用語の使用はほとんど見られなくなってしまっている．本稿では用語使用の現状を考慮し，便宜上ではあるがモダリティー$_1$を概念的モダリティー(notional category of modality)，モダリティー$_2$を文法的モダリティー(grammatical category of modality)と呼ぶことにする．

上記の先行研究を通じて分かるように，朝鮮語にムードという文法範疇を設定することに関し，研究者間の合意が得られていない．de Haan(2005)によれば，ムードは文の形成において必須の屈折範疇であると言うが，これは屈折性の強い言語に該当し，膠着性の強い言語の場合はムードの設定が容易ではないと思われる．서정수(1986)，조일영(1995)，Wymann(1996)，임동훈(2008)で主張されたように，終結語尾によって成り立つ文体法が，一般的な文環境において必ず現れるという点を考慮すれば，文体法こそ朝鮮語のムード範疇であると見なすことが可能であるように思われる．しかしながら，朝鮮語の文体法は主に「聞き手に対する話し手の要求内容」を表す発話内効力に関連した範疇であるのに対し，屈折性の強い言語において確認されるムードは「命題の内容に対する話し手の主観的な態度」を表す文法的手段である．したがって，文体法とムードを同一視するには少なからず問題があると思われる．

朝鮮語にムード範疇を強いて設定する場合，連体形語尾および名詞形語尾の体系が，これに該当する可能性を帯びている．임동훈(2008)では，ムードは節において必ず現れる文法範疇であり，終結語尾の体系，連体形語尾の体系，名詞形語尾の体系がムードであると主張されている．終結語尾の体系をムードと見なす場合の問題点については上で述べたとおりであるが，注目すべきは連体形語尾の体系および名詞形語尾の体系をムード範疇として捉えたという点である．임동훈(2008: 240-241)によれば，連体形語尾の‘Ⅱ-ㄴ’と‘Ⅱ-ㄹ’の対立および名詞形語尾の‘Ⅱ-ㅁ’と‘Ⅰ-기’の対立はそれぞれ現実ムード(realis mood)と非現実ムード(irrealis mood)の対立であると言う．現実ムードとは，話し手が言及内容を現実世界と同一視している場合，すなわち言及内容と現実世界の内容が一致していると話し手が判断する場合に用いられるムードの類型である．一方，非現実ムードとは話し手が言及内容を現実世界と同一視しない場合に用いられるムードの類型である．現実ムードと非現実ムードの対立は，現実性と非現実性の概念的対立に基盤を置いているという点で，直説法(indicative)と接続法(subjunctive)の対立と似ている．確かに概念的特徴においては，連体形語尾の‘Ⅱ-ㄴ’と‘Ⅱ-ㄹ’の対立および名詞形語尾の‘Ⅱ-ㅁ’と‘Ⅰ-기’の対立は直説法と接続法の対立に似ているため，朝鮮語

におけるムードとして見なすことが出来るのかも知れない．しかしながら，屈折性の強い言語におけるムードは基本的に節の構成において必須の成立条件であるのに対し，朝鮮語の現実ムード/非現実ムードの対立は連体節と名詞節にのみ確認される限定的なものである．また박재연(2006: 101)が指摘するように，現実ムード/非現実ムードの対立は現実性/非現実性という範疇的概念(categorical notion)であるのに対し，いわゆるモーダルマーカーによって表されるモーダルな意味(modal meanings)は尺度的概念(scalar notion)であるという違いがある．例えば，'Ⅰ-겠-'は情報の蓋然性の程度に関連した意味領域の一定の範囲を扱うのに対し，'Ⅱ-ㄹ'は先行する用言が表す内容が非現実の領域に属するということを示すという違いがある．屈折性の強い言語に確認されるようなムード範疇を朝鮮語に設定するには少なくとも上で述べた問題について妥当性の高い説明を示す必要があるように思われる．

上記の内容と関連させてモーダルな分析的形式について考えてみよう．分析的形式は語彙的要素(lexical elements)と文法的要素(grammatical elements)の有機的な結合体であり，総合的形式(synthetic forms)に比べて文法化(grammaticalization)が未熟である．장경희(1985)や박재연(2006)で設定されたモダリティー範疇(文法的モダリティー)はかなり文法化が進んだ形式('Ⅰ-겠-', 'Ⅰ-더-', 'Ⅰ-구나'等)により成り立っている．文法化が進んだ形式と文法化が遅れた形式を同じ次元で扱うのは避けるべきであり，当該の分析的形式がモーダルな意味を持っているとしても文法化の進んだモーダルマーカーと同列に論じるのは望ましいことではない．例えば'Ⅱ-ㄹ 것이-'は，モーダルマーカーの'Ⅰ-겠-'と比較されるほど意味的な類似性が高いが，ひとまずは両者を区別するべきであろう．したがって本稿では，モーダルマーカーと類似した意味を持つ各種の言語的手段を包括的に扱う「準モダリティー(modalityness)」の領域を設定することを提案しようと思う．この理由は，朝鮮語の関連学界においてモダリティー$_1$(概念的モダリティー)とモダリティー$_2$(文法的モダリティー)を区別して用いる場合が少なく，モーダルマーカーでない形式を対象にした議論でも「モダリティー」の用語が使用されているという問題を解消するためである．モーダルマーカーによって成り立つ文法範疇を指し示す用語として「モダリティー$_2$(文法的モダリティー)」を使用している現状において(この用語が定着してしまった状態で)，また別の定義の「モダリティー」の用語を使用するのは新たな混乱を引き起こす危険性を孕んでいる．

本稿の研究対象であるモーダルな意味を持つ分析的形式は，モーダルマーカーに比べ文法化が進んでいない形式であるため準モダリティーに属すると考えられる．モーダルな分析的形式の中でも差があり，一部の

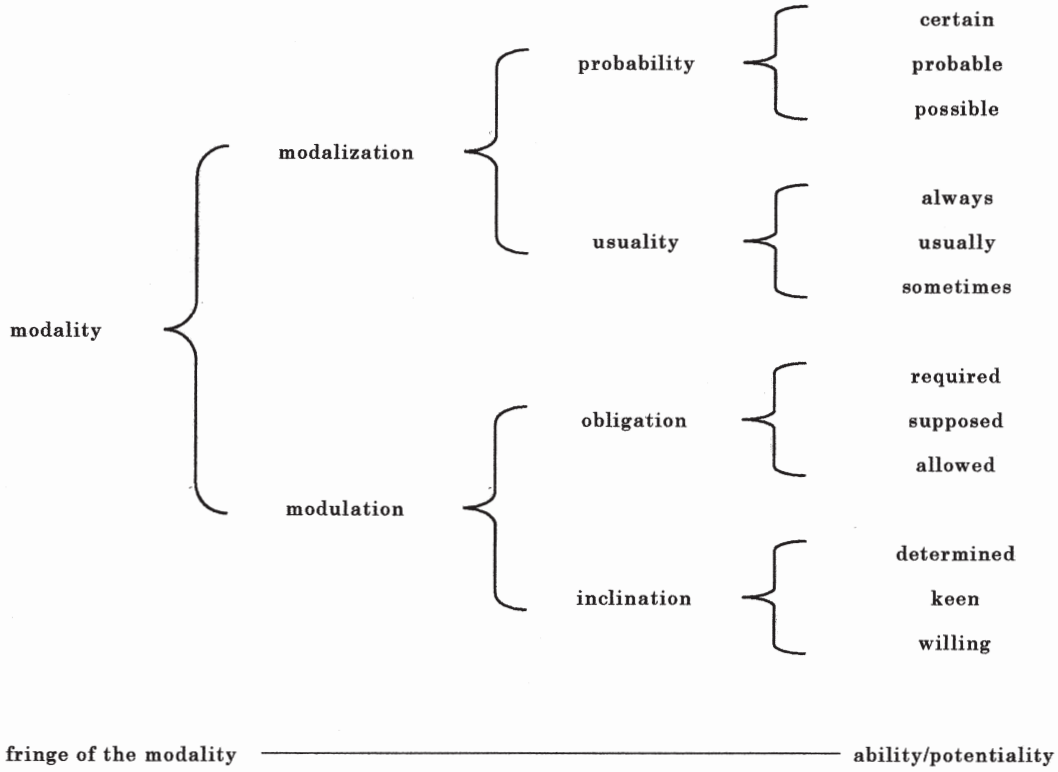
分析的形式はモーダルマーカーに極めて近い特徴を有する．各分析的形式の特徴については第3節において示すことにする．

2.2. 概念的モダリティーの枠組み

Halliday & Matthiessen(2004)では，「情報(information)の交換を目的とした命題(proposition)」対「品物または行為(goods & services)の交換を目的とした提言(proposal)」の観点から概念的モダリティーをモダライゼーション(modalization)とモジュレーション(modulation)に分類している．Halliday & Matthiessen(2004: 116)によれば，命題を対象とするモダライゼーションは，言及内容の蓋然性(probability)の高低，および言及内容の頻度性(usuality)の高低を表し，提言を対象とするモジュレーションは動作実現の望ましさ(desirability)に関する程度を表すが，当該の動作実現の必要性が動作者にとっての内的要因に関連するのか，外的要因に関連するのかによって「意志性(inclination)」と「義務性(obligation)」に区別されると言う．蓋然性，頻度性，意志性，義務性の 4 つは程度の強さ(弱/中/強)によって，それぞれ 3 つの段階に分類される．すなわち，蓋然性は「可能(possible)」，「蓋然(probable)」，「確然(certain)」の 3 つに，頻度性は「稀(sometimes)」，「頻繁(usually)」，「恒常(always)」の 3 つに，意志性は「消極的な意志(willing)」，「積極的な意志(keen)」，「決意(determined)」の 3 つに，義務性は「許可(allowed)」，「勧奨(supposed)」，「強制(required)」の 3 つに分類が可能である(Halliday & Matthiessen 2004: 618-619)．また Halliday & Matthiessen(2004: 621)が指摘するように，これら 4 つとは別途に，「能力(ability)」と「潜在性(potentiality)」をモダリティーの枠組みの外辺(fringe)[1)]で扱う必要がある．「能力」は動作者に内在する要因によって当該の動作を実現させることを表すため，意志性の「消極的意志」に近い特徴を持つと言える．一方，「潜在性」は動作者にとって外的な要因により動作の実現が成立することを表すという点では，義務性の「許可」に似た特徴を有していると考えられる．

上記の Halliday & Matthiessen(2004)による概念的モダリティーの枠組みは，次の【図 1】のとおりである．

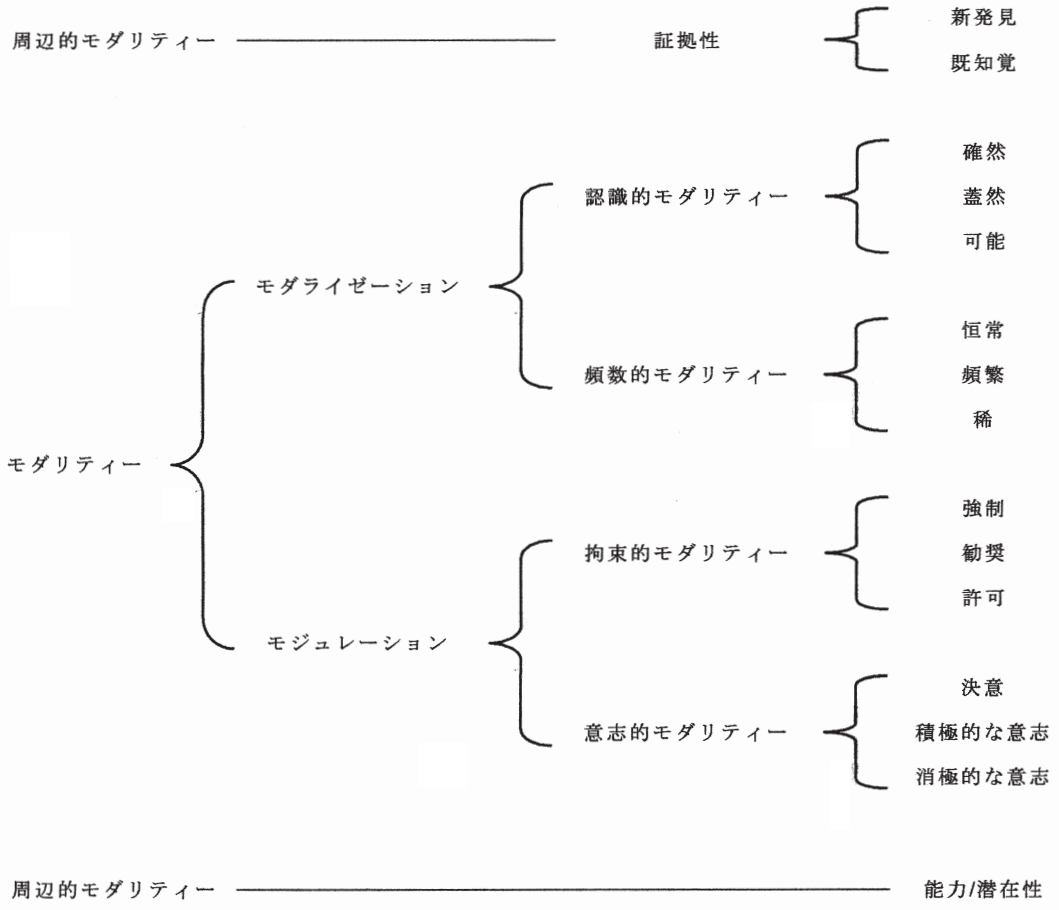
【図1】Halliday & Matthiessen(2004)による概念的モダリティー



Halliday & Matthiessen(2004)による枠組みは，円滑で効果的な意思疏通のための手段として概念的モダリティーを考慮したものであり，話し手の主観的態度が，どのような目的で表されるのかについて記述するのに適している．したがって，本稿では上記の【図1】の枠組みを援用することにする．しかしながら，Halliday & Matthiessen(2004)において提案された用語は既存のモダリティー研究において使用されてきた用語とかなり異なり，またモーダルな意味に関連する用語との使用上の重複問題が生じる危険性を抱えているため，本稿では「蓋然性」の代わりに「認識的モダリティー」，「頻度性」の代わりに「頻数的モダリティー」，「義務性」の代わりに「拘束的モダリティー」，「意志性」の代わりに「意志的モダリティー」の用語を使用することにする．また，上記の【図1】の枠組みに周辺的なモダリティーとして「証拠性(evidentiality)」を追加する必要がある．証拠性とは，命題/提言の内容に関する信憑性を扱うものである．認識的モダリティーと証拠性の区別に関しては研究者によって見解が異なるが，本稿では両者を区別する立場をとる．認識的モダリティーは命題内容に対する蓋然性の程度を判断主体の主観的態度を通じて表すものであるのに対し，証拠性は言及内容

(命題もしくは提言，時には命題内容に対する蓋然性判断を含むもの)の信憑性を裏付けるための根拠の存在を明示または暗示するものである．例えば，モーダルマーカーの‘I-겠-’と‘I-네’を比べてみよう．この2つの文法形式は，いずれも박재연(2006)において認識的モダリティーを表す文法形式として扱われている．しかしながら‘I-겠-’と‘I-네’がそれぞれ表すモーダルな意味はかなり異なる．‘I-겠-’は命題に対する話し手の蓋然性判断，すなわち「推量」の意味を表すのに対し，‘I-네’は言及内容に関する情報を発話時点において新たに知覚したことを表す「新発見」の意味を表す．情報の確実性の問題を度外視するとすれば，‘I-겠-’と‘I-네’はいずれも情報に根拠を置いた話し手の主観的態度を表すという共通点を有すると言える．しかしながら，‘I-겠-’には命題に対する蓋然性判断の機能があるのに対し，‘I-네’にはそのような機能は無く，単に知覚した情報をそのまま言及するに過ぎない．よって認識的モダリティーと証拠性は区別されるべきであり，以下の【図2】のようなモダリティーの枠組みを設定することにする．

【図2】本稿における概念的モダリティーの枠組み



近年，証拠性に関する議論が活発にされており，朝鮮語の関連学界においてもこれと関連する研究が発表されている．類型論において証拠性とは，話し手による言及内容が事実であることを裏付けるための情報の出処を表示する文法的手段のことを言う[2)]．証拠性を別個の文法範疇として設定するのか否かは個別言語の特徴によって左右され，また研究者の見解によっても異なり得る．本稿は朝鮮語において証拠性を別個の文法範疇として設定する立場はとらず，周辺的なモダリティーに属する文法的手段の1つであると見る．次の2.3では，朝鮮語において証拠性を表すと考えられる文法形式について概観することにする．

2.3. 証拠性の文法形式

近年の研究では、先語末語尾の‘Ⅰ-더-’および終結語尾の‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’について証拠性の観点から議論されている．以下では‘Ⅰ-더-’，‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’について先行研究の見解を概観し，これらの形式についての本稿の見解を示したいと思う．

2.3.1. 先語末語尾‘Ⅰ-더-’

近年の‘Ⅰ-더-’に関する先行研究は，主にモダリティーもしくは証拠性に関連付けて論じられている．장경희(1985)では‘Ⅰ-더-’を「過去知覚」を表す形式と見なしており，박재연(2006)では장경희(1985)の見解を継承および修正することで，‘Ⅰ-더-’を「過去知覚，新発見，未知仮定」を表す認識的モダリティーの文法形式と見なしている．송재목(1998)は，‘Ⅰ-더-’を「過去の感覚的観察」を表す証拠性の文法形式と見なしている．송재목(1998)はBybee(1985)の見解にしたがって，証拠性をモダリティーの範疇に取り入れているが，後続研究としての송재목(2009)においては，‘Ⅰ-더-’を証拠性の文法形式と見なし，モダリティーと区別すべき別個の範疇に属するものとして捉えている．장경희(1985)，박재연(2006)，송재목(1998, 2009)では‘Ⅰ-더-’をモダリティーの文法形式として見なすか，証拠性の文法形式として見なすかといった見解上の違いはあるが，‘Ⅰ-더-’の意味についての考察はほぼ同じである．김진웅(2012)では‘Ⅰ-더-’が‘Ⅰ-겠-’に後続するという統辞的現象を根拠に‘Ⅰ-더-’を証拠性の文法形式として扱っている．Lee(2011)は類型論研究の立場から‘Ⅰ-더-’を

考察しており，‘Ⅰ-더-’は証拠性を表す文法形式であるが，汎言語的な証拠性の文法形式が持つ特徴とは異なり，‘Ⅰ-더-’自体が特定の証拠の類型(すなわち，視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚等)を明示しない点を指摘している．またLee(2011)は，‘Ⅰ-더-’に先語末語尾の‘Ⅲ-ㅆ-’や‘Ⅰ-겠-’が先行する場合(すなわち，‘Ⅲ-ㅆ더-’や‘Ⅰ-겠더-’)は，間接的証言解釈(indirect evidential reading)が可能であり，反対に‘Ⅰ-더-’に先語末語尾の‘Ⅲ-ㅆ-’や‘Ⅰ-겠-’が先行しない場合は直接的証言解釈(direct evidential reading)が可能であると主張している．以下では，上述の先行研究による見解の妥当性について検証してみよう．

以下の例文(1a)の‘연락한다더니(連絡すると言っていたのに)’と(1b)の‘그런 얘기 안 하시던데(そんなことはおっしゃってなかったよ)’では，話し手が聴覚を通じて得た情報を聞き手に伝達している．(1c)の‘안 보이더라(見掛けなかったよ)’の場合は視覚を通じた情報を聞き手に伝達している．また(1d)の‘많던데(多いのですが)’の場合は聴覚なのか視覚なのかは明確ではないが，感覚を通じて得た情報を聞き手に伝達している．(1e)の‘좋더라’では話し手の心理状態を表しているが，これは話し手が自己の感情を客観的に捉えた結果，「나는 니가 좋다(私はお前が好きだ)」という内容を伝達するものであると解釈出来る．この場合，話し手は自己の感情を内省や感覚を通じて分析しているのである．(1a～e)の例文から判断するに，장경희(1985)，박재연(2006)，송재목(1998，2009)において共通して指摘された‘Ⅰ-더-’の意味についての見解は妥当性の高いものであると判断される．

(1) a. 최교수, 환자 PET-CT 보고 <u>연락한다더니</u> 직접 왔어? <MBC 2007a>
(崔教授，患者のPET-CTを見てから連絡すると言ってたのに直接来たの？)

b. 사장님 어머니 만났는데 <u>그런 얘기 안 하시던데</u>. <MBC 2007b>
(社長のお母さんに会ったけど，そんなことはおっしゃってなかったよ．)

c. 너 보려고 나가봤는데, 며칠째 <u>안 보이더라</u>. <MBC 2007b>
(お前に会おうと出かけてみたんだけど，ここ数日のあいだ見掛けなかったよ．)

d. 계열사가 <u>많던데</u>, 어느 쪽에 관심 있으세요? <MBC 2007b>
(系列会社が多いのですが，どの方面に関心がございますか？)

e. 난 너 참 듬직하고 <u>좋더라</u>. <MBC 2007b>
(私はお前が本当に頼もしくて好きだ．)

‘Ⅰ-더-’に‘Ⅲ-ㅆ-’や‘Ⅰ-겠-’が先行した形式である‘Ⅲ-ㅆ더-’および‘Ⅰ-

겠더-'の場合も，'Ⅰ-더-'は感覚を通じて得た情報を基に言及内容の妥当性を裏付ける機能を持つ．Lee(2011)は，'Ⅲ-ㅆ더-'や'Ⅰ-겠더-'の結合形式が「推量」の意味を表すと捉え，これを根拠に'Ⅰ-더-'を認識的モダリティーと関連させて論じているが，本稿はこのような見解には懐疑的である．Lee(2011)は，'Ⅲ-ㅆ더-'や'Ⅰ-겠더-'が"비가 왔더라."や"비가 오겠더라."のような例文において，命題である"비가 오-"に対する「推量」を表すと見なしている．しかしながら，これらの例文において'Ⅰ-더-'の作用領域は"비가 오-"ではなく，"비가 왔-"および"비가 오겠-"であると見るべきである．"비가 오겠더라."という文において「推量」の意味を見い出すことが出来るのは，先語末語尾の'Ⅰ-겠-'が含まれているからである．一方，"비가 왔더라."という文の使用には，例えば「建物の中から外に出てみたところ，広範囲において地面が濡れていた」という状況を経験していることが前提として要求される．すなわち，この文が用いられる文脈的背景には，雨が降っている場面を話し手が目撃してはいないが，雨が降った後に残った結果を話し手が直接目撃しているという前提が置かれている．したがって，'Ⅰ-더-'の本質的役割は，話し手が直接経験した出来事に対する証拠の提示以外の何物でもない．Lee(2011)の主張する間接的証言解釈は，作用対象を"비가 오-"であると見なした場合に表される二次的な解釈に過ぎず，これを根拠に，'Ⅰ-더-'に認識的モダリティーの用法を設定するのは少々行き過ぎた見解であると考えられる．また，'Ⅲ-ㅆ더-'の結合が常に間接的証言解釈としての「推量」として捉えられる訳ではない．以下の例文(2)は'Ⅲ-ㅆ더-'の結合を含んでいるが，命題内容に対する「推量」の意味が表されていない．

(2) 유언비어도 계속 양산되면 사실이 됩니다. 어제 밤엔 진범은 고위층의 자제 K모양이란 글까지 올라왔더군요. <SBS 2011>
(流言飛語も量産され続ければ，事実になります．昨晩には真犯人が高位層の子息のK某さんだという書き込みまでありましたよ．)

'Ⅰ-더-'が動詞の語幹に直接結合した場合は，当該の動詞の表す動作が実現している状況に焦点を当てた証拠性を提示し，'Ⅲ-ㅆ더-'の場合には，動作が完了した後の状況に焦点を当てた証拠性を提示し，'Ⅰ-겠더-'の場合には，未実現の動作が実現されようとする状況に焦点を当てた証拠性を提示すると言える．つまり，"비가 오더라."の場合は「雨が降っている」状況に，"비가 왔더라."の場合は「雨が降った後」の状況に，そして"비가 오겠더라."の場合は「雨が降る前」の状況にそれぞれ焦点を当てた証拠性を示しているのである．

また‘Ⅰ-더-’は以下の例文(3)が示すように，「推量」の意味を表す分析的形式に後続することが出来る．この場合もやはり‘Ⅰ-더-’は，命題内容に対する判断主体の蓋然性判断を対象として単に話し手の主観を通じた証拠性を提示する役割を担っているに過ぎない．

(3) a. 그 문제 때문에 자치회 간부들이 내일 건설회사에 찾아갈 모양이더라. <한만수 2011>
(その問題のせいで自治会の幹部達が明日建設会社に出向くようだよ．)

b. 일단은 내가 방법을 알아볼 테니까 넌 내 전화 잘 받아라. 당분간은 쓸데없는 외출도 하지 말고 몸조심해. 지금 빚쟁이들이 돈 못 받을까봐 혈안이 되어 있는 상태야. 한 번 잡히면 안 놔줄 것 같더라. 내가 오늘 겨우 돌려보냈으니까 너도 조심 좀 하고. <고득성 2009>
(ひとまずは私が方法を探してみるから，お前は私の電話にはちゃんと出るんだぞ．当分の間は外出もせずに、気をつけて．今，借金取り達がお金を回収出来なくなるんじゃないかと血眼になっている状態さ．一度取っ捕まったら，逃がしてくれないだろうよ．私が今日はなんとか追い返したから，お前もちょっとは気をつけるんだぞ．)

‘Ⅰ-더-’を認識的モダリティーを表す文法形式と見なす場合，まず‘Ⅰ-더-’それ自体には蓋然性の意味を表す機能が備わっていないという点，‘Ⅰ-더-’と‘Ⅰ-겠-’との結合や‘Ⅰ-더-’と「推量」の意味を表す分析的形式との結合が可能な点について，合理的な説明が要求されるであろう．用言の語幹に直接結合が可能なだけでなく，各種のモーダルな形式との結合が可能であり，言及内容を裏付けつつ，話し手の主観的態度を表す機能を持っている点を鑑みた場合，‘Ⅰ-더-’は周辺的なモダリティーとしての証拠性を表す文法形式であると判断されるべきである．

2.3.2. 終結語尾‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’

장경희(1995)では‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’をモーダルマーカーと見なしており，‘Ⅰ-네’を「現在知覚」，‘Ⅰ-구나’を「新発見」，‘Ⅰ-지’を「既知覚」を表す形式と捉えている．박재연(2006)では‘Ⅰ-네’と‘Ⅰ-구나’について情報の獲得方法と情報の内面化の程度という2つの観点から考察し，‘Ⅰ-네’は「現在知覚」と「新発見」を，‘Ⅰ-구나’は「知覚/推論」と「新発見」を表すと見なしている．また‘Ⅰ-지’については情報の内面化の程度と聞き手の知識に対する仮定といった2つの観点から考察

し，「既知覚」と「既知仮定」を表す形式として捉えている．意味的特徴の記述において장경희(1995)と박재연(2006)の見解は似ているが，박재연(2006)が‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’を認識的モダリティーの文法形式として見なしているという点において違いが見られる．

임동훈(2008)では，‘Ⅰ-네’は「現場知覚による感嘆」を，‘Ⅰ-구나’は「話し手の内省を介した発見」を，‘Ⅰ-지’は「命題内容に対する既知覚」を表すと述べている．‘Ⅰ-네’と‘Ⅰ-지’については장경희(1995)および박재연(2006)の見解と同様であるが，‘Ⅰ-구나’についての見解においては若干の違いがあるようだ．임동훈(2008)は，‘Ⅰ-구나’が「新発見」の意味に加え，命題内容を事実として捉える機能を有すると見なしているが，これには同意し難い．例えば以下の例文(4)が示すとおり，‘Ⅰ-구나’の前には「推量」を表す文法形式が現れることが可能であり，この場合の命題内容は疑う部分の無い事実として認識されていない．‘Ⅰ-구나’自体には命題内容を事実として甘受させる機能は無く，命題に対する蓋然性判断とは無関係に，当該の言及内容に関する情報を新たに知覚したことを表示する形式に過ぎない．

(4) 그때 한 일곱 여덟 살이나 먹었던가? 그러고 보니 지금쯤은 스무 살 다 되었겠구나. <21세기 세종계획/BREO0295.txt>
(あの時，7～8歳ぐらいだったかな？そうだとしたら，今頃はもう20歳になってるんだろうな．)

송재목(2011)では‘Ⅰ-네’を「現在における直接観察」を表す証拠性提示の形式として見なした．‘Ⅰ-네’を証拠性提示の形式として捉えている点を除けば，장경희(1995)，박재연(2006)，임동훈(2008)と同様の見解であると言える．김진웅(2012)では以下の例文(5a)を根拠に‘Ⅰ-네’を視覚を含めた多様な感覚的情報に依拠した直接証拠を提示する形式と捉えている．また(5b)が示すとおり，‘Ⅰ-네’には‘Ⅰ-겠-’が先行するという統辞的現象を考慮し，‘Ⅰ-네’を文法範疇としての証拠性に属する形式として見なしている．このような点において송재목(2011)および김진웅(2012)は証拠性を文法範疇として設定する立場にあると言える．

(5) a. 한밤에 새가 우네. <김진웅 2012>
(真夜中に鳥が鳴いているよ．)
b. 기어코 도둑을 잡겠네. <김진웅 2012>
(遂に泥棒を捕まえるんだね．)

박진호(2011)によれば，‘Ⅰ-구나’は情報の入手経路を特定の種類に制

限しないが，‘Ⅰ-네’は情報の入手経路を制限するという違いがあると言う．以下の例文(6)が示すように，‘Ⅰ-네’は‘Ⅰ-구나’とは異なり，伝聞によって得た情報を根拠とする場合は使用が不可能であるという制限を持つ．

(6) “합격자 명단 보니까 철수도 있더라."
“철수도 합격했{구나/*네}.” <박진호 2011>
(「合格者名簿にはチョルスの名前もあったよ．」)
(「チョルスも合格したんだね．」)

Kim(2012)では‘Ⅰ-지’を推量証拠のマーカー(inference evidential marker)として見なし，情報の源泉が直接的な観察もしくは事実に依拠した推量にあるという見解を示している．以下の例文(7a)において確認できるように，‘Ⅰ-지’は直接的な観察に基づいた情報に依拠して発言する際に用いられているのが分かる．しかしながら，例文(7b)のとおり‘Ⅰ-겠-’と‘Ⅰ-지’の結合が可能な点を考慮すれば，‘Ⅰ-지’自体には推量の機能は無く，文脈的な解釈によって「推量」の意味として捉えることが可能であるのに過ぎないと見なすのが妥当であろう．

(7) a. 국민학교 1학년 때, 우린 또 같은 반이 되었어. 둘 다 그 사실에 매우 기뻐했지. <21세기 세종계획/2BNXXX06.txt>
(小学校1学年の時，私たちはまた同じクラスになった．2人ともその事実にとても喜んだよ．)
b. 조금 더 기다려 보자. 결국 우리가 일을 안하면 회사도 손해를 보기 때문에 무슨 타협안이 나오겠지. <21세기 세종계획/2CE0001.txt>
(もう少し待ってみよう．結局，我々が仕事をしなければ会社も損害を被るのだから，何かしらの妥協案が出るだろうさ．)

上述のように，‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’は話し手の主観的な知覚に関連した意味を表し，言及内容の信憑性を裏付ける機能を持つ．‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’が先語末語尾の‘Ⅰ-겠-’に結合が可能であるという事実を考慮すれば，‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’を認識的モダリティーの文法形式と捉えるのは妥当ではない．‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’が言及内容に対する話し手の知覚を提示する機能を持っているからといって，朝鮮語に証拠性の文法範疇を設定できると判断するのもまた適切ではないだろう．박진호(2011: 21)において指摘されているように，証拠性の特性を唯一の意味として持つ文法形式は朝鮮語にはほとんど存在しないため，朝鮮語に証拠性の文法範疇を設けることは不適当である．また，‘Ⅰ-네’，

‘Ⅰ-구나’, ‘Ⅰ-지’は言及内容に対する真偽判断を下すのではないが，真偽判断を裏付ける話し手の知覚行為を提示するという点で，話し手の主観的態度を表すと見なすことが出来る．本稿ではこのような事実に根拠を置き，証拠性提示の機能を持つ‘Ⅰ-네’, ‘Ⅰ-구나’, ‘Ⅰ-지’を周辺的なモダリティーに属する文法形式と捉えることにする．

2.4. モダリティーの程度性

本稿では，文法化が高度に進んだ形式が概念的モダリティーに関連するモーダルな意味を表す場合，当該の文法形式を文法的モダリティーと見なす立場をとる．文法的モダリティーは一部の先語末語尾および終結語尾により成り立ち，これらはモーダルマーカーと呼ばれる．本稿の考察対象であるモーダルな分析的形式は，モーダルマーカーに比べ文法化が未熟な段階にあり，語彙的要素と文法的要素の有機的な結合体であると言える．モーダルマーカーと同様に，モーダルな分析的形式はモーダルな意味を表すことが出来るが，両者を1次的には区別して論じる必要がある．両者を区別して考察することで，朝鮮語のモダリティー体系(文法的モダリティーと準文法的モダリティーの総体)におけるモーダルな分析的形式の役割およびモーダルマーカーとの相関関係を把握することが出来る．ここではモーダルな分析的形式とモーダルマーカーとの近接性を判断するための基準を設定し，第3節において展開される当該の分析的形式についての考察に役立てたいと思う．

【表2】モダリティーの程度性についての測定項目

	モダリティーの程度性	
(a) モーダルな意味を表す	O	モダリティー的
	X	非モダリティー的
(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す	O	モダリティー的
	X	非モダリティー的
(c) 否定形式の作用領域の外に位置する	O	モダリティー的
	X	非モダリティー的
(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	O	モダリティー的
	X	非モダリティー的

本稿では，モーダルな分析的形式とモーダルマーカーとの近接性のことをモダリティーの程度性(degrees of modality)と呼ぶことにする．モ

ダリティーの程度性が高ければ高いほど，モーダルマーカーに近い文法形式であると判断される．朝鮮語における文法的モダリティーの最も典型的なものはモーダルマーカーであるため，モダリティーの程度性を測定するための項目は，モーダルマーカーの意味的および統辞的特徴を基に設定するのが妥当であると考えられる．モダリティーの程度性の測定項目は上記の【表2】のとおりである．【表2】の(a)および(b)は意味的観点から，(c)および(d)は統辞的観点からモーダルマーカーの特徴を反映した項目であると言える．

第1に，当該の分析的形式がモーダルな意味を表すのかについて問う項目を設定することが出来る．2.2の【図2】で示した概念的モダリティーの枠組みに属するモーダルな意味を表すことが出来てこそモダリティー的性格を有していると見なすことが可能になる．したがって，全てのモーダルな分析的形式は少なくとも【表2】における(a)の基準を満たす必要がある．

第2に，当該の分析的形式が話し手の主観的態度に関連したモーダルな意味のみを表すのか否かによって，モダリティーの程度性を判断することが可能である．原則的にモーダルマーカーは話し手の主観的態度と関連したモーダルな意味のみを表す[3]．例えば，以下の例文(8a)において‘Ⅰ-겠-’は命題に対する話し手の蓋然性判断を表しており，(8b)における‘Ⅲ-야지’は話し手の「決心」を表している．これらの形式は第3者の「推量」や「決心」を表すことはなく，常に話し手の主観的態度を表すことに特化している．よって当該の分析的形式が，話し手の主観的態度のみを反映したモーダルな意味を表す場合，モダリティーの程度性が高いと判断される．

(8) a. 나이트 샤말란 감독은 스크린을 피로 적시지 않으면서도 보이지 않는 초자연적 존재의 분위기만으로 관객들을 조금씩 조여 가며 긴장을 자아낸다. 하지만 초자연적인 존재의 정체가 구체적으로 등장하는 순간부터 오히려 영화는 힘을 잃는다. 만약 모든 일을 예정돼 있다고 믿는 관객은 ‘싸인’의 다소 황당한 결말도 <u>흥미롭겠다</u>. **<21세기 세종계획/6BA02B16.txt>**

(ナイト=シャマラン監督は，スクリーンを血で染めなくとも，目に見えない超自然的な存在の雰囲気のみで観客を少しづつ追い詰めて行き緊張を誘う．しかし，超自然的な存在の正体が具体的に登場した瞬間からは，むしろ映画は力を失う．もし全てのことが予定されていると信じている観客には，「サイン」の多少荒唐無稽な結末も興味深いことであろう．)

b. 우리가 <u>책임을 져야지</u>. **<21세기 세종계획/2CG00002.txt>**

(我々が責任を取らないと．)

第3に，当該の分析的形式が否定形式の作業領域の外に位置するのか否かを判断基準として設定することが可能である．これは否定形式の後続の可否によって，モダリティーの程度性の高低を判断するものである．以下の例文(9a～e)が示すように，モーダルマーカーには否定形式が後続しない．したがって，当該の分析的形式がモーダルな意味を表したとしても，否定形式の後続が可能である場合はモダリティーの程度性は低いと判断するべきである．

(9) a. *농수산시장에 가겠지 않는다.
b. *나 그대를 영원히 사랑하리지 않는다.
c. *그 사람은 학교에 오더지 않는다.
d. *빨리 준비하고 가야지지 않는다.
e. *난 이제 은행으로 가거든지 않는다.

第4に，当該の分析的形式が，過去時制の形式の作用領域の外に位置するのかについて問う項目を設定することが出来る．'Ⅲ-ㅆ-'の後続の可否によって，モダリティーの程度性の高低を把握するのが目的である．以下の例文(10a～e)が示すように，モーダルマーカーの後には'Ⅲ-ㅆ-'が結合出来ない．このような統辞的現象に基づき，一般的にモーダルマーカーは発話時点と関連させて話し手の主観的態度について言及する機能を持つと言える．例えば"비가 오겠다.(雨が降りそうだ)"という例文において，モーダルマーカーの'Ⅰ-겠-'はこれから起こり得る蓋然的な状況に対する発話時点での話し手による主観的判断を表している．また，"버스 정류장에서 기다리고 있더니 갑자기 비가 오더라.(バス停で待っていたら，急に雨が降ってきたんだよ)"という例文では，話し手が過去の時点において経験した出来事を発話時点の話し手の態度(すなわち，回想)を通じて表している．このようなことから，当該の分析的形式が，話し手の態度を発話時点に関連させて表す機能を持っている場合，モダリティーの程度性が高いと言える．

(10) a. *농수산시장에 가겠었다.
b. *나 그대를 영원히 사랑하리었다.
c. *그 사람은 학교에 오덨다.
d. *빨리 준비하고 가야지었다.
e. *난 이제 은행으로 가거든었다.

上記の【表2】の(a)は，当該の分析的形式を準文法的モダリティー形

式と判断するための必須条件であり，(b)～(d)は分析的形式が統辞的および意味的にどの程度モーダルマーカーに近い特徴を持っているのかについて判定するための項目である．

3. モーダルな分析的形式概観

本稿では以下の(11a～c)が示す分析的形式を考察対象とする．

(11) a. モダライゼーションの分析的形式

1) ‘Ⅱ-ㄴ 것이-’/‘Ⅰ-는 것이-’
2) ‘Ⅰ-는 법이-’
3) ‘Ⅰ-기 마련이-’
4) ‘Ⅱ-ㄴ 것 같-’/‘Ⅰ-는 것 같-’/‘Ⅱ-ㄹ 것 같-’
5) ‘Ⅱ-ㄴ 모양이-’/‘Ⅰ-는 모양이-’/‘Ⅱ-ㄹ 모양이-’
6) ‘Ⅱ-ㄴ 성싶-’/‘Ⅰ-는 성싶-’/‘Ⅱ-ㄹ 성싶-’
7) ‘Ⅱ-ㄴ 듯싶-’/‘Ⅰ-는 듯싶-’/‘Ⅱ-ㄹ 듯싶-’
8) ‘Ⅱ-ㄴ 듯하-’/‘Ⅰ-는 듯하-’/‘Ⅱ-ㄹ 듯하-’
9) ‘Ⅱ-ㄹ 법하-’
10) ‘Ⅱ-ㄴ가 보-’/‘Ⅰ-는가 보-’
11) ‘Ⅱ-ㄴ가 싶-’/‘Ⅰ-는가 싶-’
12) ‘Ⅱ-ㄹ 리 있-’/‘Ⅱ-ㄹ 리 없-’

b. モジュレーションの分析的形式

1) ‘Ⅰ-고자 하-’/‘Ⅱ-려고 하-’
2) ‘Ⅰ-고 싶-’
3) ‘Ⅲ-ㅆ으면 싶-’/‘Ⅲ-ㅆ으면 하-’
4) ‘Ⅱ-면 되-’/‘Ⅱ-면 안 되-’
5) ‘Ⅲ-서는 안 되-’
6) ‘Ⅲ-도 되-’
7) ‘Ⅲ-야 되-’/‘Ⅲ-야 하-’

c. 多義的モダリティーの分析的形式

1) ‘Ⅱ-ㄹ 것이-’/‘Ⅱ-ㄹ 터이-’
2) ‘Ⅱ-ㄹ까 보-’/‘Ⅱ-ㄹ까 싶-’

d. 周辺的モダリティーの分析的形式

1) ‘Ⅱ-ㄹ 줄 알-’/‘Ⅱ-ㄹ 줄 모르-’
2) ‘Ⅱ-ㄹ 수 있-’/‘Ⅱ-ㄹ 수 없-’

各分析的形式の統辞的および意味的特徴とモダリティーの程度性については，다카치(2014)による考察を基に以下の【表3】のとおり整理す

ることが出来る.

【表3】分析的形式の統辞的特徴，意味的特徴，モダリティーの程度性

‘Ⅱ-ㄴ 것이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文		疑問文	平叙文		疑問文
		O		O	O		O
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	O	O
意味的特徴	モーダルな意味	「既定的状況に対する断定」(認識的モダリティー：確然)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-는 것이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文		疑問文	平叙文		疑問文
		O		O	O		O
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「確定的状況に対する断定」(認識的モダリティー：確然)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘I-는 법이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	X	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			O		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘I-겠-’		‘I-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	「一般性の強い内容に対する断定」 (認識的モダリティー確然，頻数的モダリティー：恒常)					

モダリティーの程度性	判断項目		
	(a) モーダルな意味を表す	O	モダリティー的
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す	O	モダリティー的
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する	X	非モダリティー的
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	X	非モダリティー的

‘I-기 마련이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			O		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘I-겠-’		‘I-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	「一般性の強い内容に対する蓋然的判断」 (認識的モダリティー確然，頻数的モダリティー：恒常)					

モダリティーの程度性	判断項目		
	(a) モーダルな意味を表す	O	モダリティー的
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す	O	モダリティー的
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する	O	モダリティー的
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	X	非モダリティー的

‘Ⅱ-ㄴ 것 같-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	O	O
意味的特徴	モーダルな意味	「既定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-는 것 같-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「確定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 것 같-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「未定的状況に対する推量」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄴ 모양이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	O	O
意味的特徴	モーダルな意味	「(話し手の五感を通じて得た情報に依拠した) 「既定的状況に対する推量」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-는 모양이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「(話し手の五感を通じて得た情報に依拠した)確定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 모양이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「(話し手の五感を通じて得た情報に依拠した)未定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	

	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	X	非モダリティー的

‘Ⅱ-ㄴ 성싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	O	O
意味的特徴	モーダルな意味	「既定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-는 성싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「確定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄷ 성싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「未定的状況に対する推量」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄴ 듯싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	O	O
意味的特徴	モーダルな意味	「既定的状況に対する推量」 「既定的状況に対する錯覚」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-는 듯하-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「確定的状況に対する推量」 「確定的状況に対する錯覚」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 듯하-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「未定的状況に対する推量」 「未定的状況に対する錯覚」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	X	非モダリティー的

‘Ⅱ-ㄹ 법하-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「(感覚的根拠による表面的で責任性の無い)未定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄴ가 보-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	X	X	X	O	O
意味的特徴	モーダルな意味	「(観察的根拠を要求する)既定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：蓋然)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	

	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	O	モダリティー的

‘Ⅰ-는가 보-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	X	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「(観察的根拠を要求する)確定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：蓋然)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄴ가 싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	X	O	O
意味的特徴	モーダルな意味	「既定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-는가 싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	O	X	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	「確定的状況に対する推量」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 리 있-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		X	X	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
			O			X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	「未定的状況に対する推量」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 리 없-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O 修辞疑問のみ	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O (修辞疑問文のみ)		X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	「未定的状況に対する否定的推量」 (認識的モダリティー：可能)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-고자 하-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「動作主の意志(文語的)」 (意志的モダリティー：決意)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	X	非モダリティー的

‘Ⅱ-려고 하-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「動作主の意志(口語的)」 (意志的モダリティー：決意)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅰ-고 싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		O	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「動作主としての話し手の意志」 (意志的モダリティー：積極的意志)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅲ-ㅆ으면 싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「話し手の意志」(意志的モダリティー：消極的意志) 2.「婉曲的な命令」(拘束的モダリティー：強制)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅲ-ㅆ으면 하-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「話し手の意志」(意志的モダリティー：消極的意志) 2.「婉曲的な命令」(拘束的モダリティー：強制)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-면 되-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「動作主に対する勧奨」(拘束的モダリティー：勧奨)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-면 안 되-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「動作主に対する禁止」(拘束的モダリティー：強制) 2.「否定的内容の命令」(拘束的モダリティー：強制)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅲ-서는 안 되-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「動作主に対する禁止」(拘束的モダリティー：強制) 2.「否定的内容の命令」(拘束的モダリティー：強制)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅲ-도 되-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「動作主に対する許可」(拘束的モダリティー：許可)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅲ-야 되-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「動作主に対する義務」(拘束的モダリティー：強制) 2.「命令」(拘束的モダリティー：強制)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅲ-야 하-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「動作主に対する義務」(拘束的モダリティー：強制) 2.「命令」(拘束的モダリティー：強制) 3.「話し手の意志」(意志的モダリティー：積極的意志)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 것이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	X	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	X		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	1.「推量」(認識的モダリティー：推量) 2.「予言」(認識的モダリティー：確然) 3.「動作主の意志」(意志的モダリティー：積極的意志)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 터이-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	X	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	X		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	1.「推量」(認識的モダリティー：蓋然) 2.「動作主の意志」(意志的モダリティー：積極的意志)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ까 보-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	X	X	X	X	X
意味的特徴	モーダルな意味	1.「(観察的根拠を要求する)未定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：蓋然) 2.「動作主の意志」(意志的モダリティー：消極的意志)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ까 싶-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	X	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O			X		
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	X	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「未定的状況に対する推量」(認識的モダリティー：可能) 2.「動作主の意志」(意志的モダリティー：消極的意志)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				O	モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				O	モダリティー的	

	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	モダリティー的	
‘Ⅱ-ㄹ 줄 알-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	O	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「未定的状況に対する予想」 (認識的モダリティー：可能) 2.「動作主の能力(肯定)」(周辺的モダリティー：能力)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 줄 모르-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	1.「未定的状況に対する無知」 (認識的モダリティー：可能) 2.「動作主の能力(否定)(周辺的モダリティー：能力)」					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する	X	非モダリティー的

‘Ⅱ-ㄹ 수 있-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	O	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		O	O	X	O	X	O
意味的特徴	モーダルな意味	「動作主の能力/潜在性(肯定)」 (周辺的モダリティー：能力/潜在性)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

‘Ⅱ-ㄹ 수 없-’							
統辞的特徴	出現可能な文体法の類型	平叙	感嘆	疑問	命令	勧誘	約束
		O	O	O	X	X	X
	否定形式との結合の可否	否定形式の先行			否定形式の後続		
		平叙文	疑問文		平叙文	疑問文	
		O	O		X	X	
	先語末語尾との結合の可否	‘Ⅲ-ㅆ-’		‘Ⅰ-겠-’		‘Ⅰ-더-’	
		先行	後続	先行	後続	先行	後続
		X	O	X	O	X	
意味的特徴	モーダルな意味	「動作主の能力/潜在性(否定)」 (周辺的モダリティー：能力/潜在性)					
モダリティーの程度性	判断項目						
	(a) モーダルな意味を表す				O	モダリティー的	
	(b) 話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表す				X	非モダリティー的	
	(c) 否定形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	
	(d) 過去時制形式の作用領域の外に位置する				X	非モダリティー的	

4. おわりに

本稿の締めくくりとして，考察内容の要約を以下に記すことにする．

2.1では，「ムード」と「モダリティー」の術語をめぐる問題について考察した．現在の韓国では，類型論研究での影響を受け「モダリティー」をモーダルマーカーによって表される話し手の主観的態度を表す文法範疇を指す術語として用いるのが一般的であり，モーダルな意味を表すモーダルマーカー以外の言語的手段を扱う際には「準モダリティー」の術語を使用することを提案した．

2.2では，Halliday & Matthiessen(2004)による概念的モダリティーの枠組みを基に，朝鮮語のモダリティーを記述するべく，証拠性を周辺的モダリティーとして追加したものを提案した．証拠性の機能を持つモーダルマーカーは，言及内容に対する蓋然性判断を示すわけではないが，言及内容の信憑性を裏付ける話し手の知覚行為を表すため，話し手の主観的態度を表すと見なすことが出来る．よって，本稿では証拠性を周辺的なモダリティーとして設定する立場を取っている．

2.3では，박재연(2004)において認識的モダリティーのモーダルマーカーとして見なされている‘Ⅰ-더-’，‘Ⅰ-네’，‘Ⅰ-구나’，‘Ⅰ-지’について考察し，これらの形式がいずれも言及内容に対する蓋然性判断を表すものではなく，話し手の主観的な知覚に関連した意味を表し，言及内容の信憑性を裏付ける機能，すなわち証拠性の機能を有する文法形式と見なすべきであるとの見解を示した．

2.4では，典型的なモダリティー形式であるモーダルマーカの持つ意味的および統辞的特徴を基に，モーダルな分析的形式とモーダルマーカーとの近接性を測定するための4つの項目を設定した．

3では，45個のモーダルな分析的形式について，その統辞的特徴，意味的特徴，そしてモダリティーの程度性を測定した結果を提示した．いくつかの形式を除き，多くのモーダルな分析的形式は，意味的特徴においてはモダリティー的性格を有するものの，統辞的特徴においては非モダリティー的性格を持つものと判断され、また話し手の主観的態度にのみ関連したモーダルな意味のみを表すのではなく，第三者に関連したモーダルな意味をも表すことが出来るというのが興味深い．これは，モーダルな分析的形式が語彙的要素と文法的要素の有機的な結合体であり，モーダルマーカーに比べ文法化が未熟であることと関係があると思われる．モーダルマーカーとモーダルな分析的形式の分布および両者の役割についての考察は，今後解明しなければならない課題の1つである．

本稿は，あくまでもモーダルな分析的形式についての基礎的な考察を

まとめたものに過ぎない．今後，次のような問題に焦点を当てた研究を進めていくつもりである．第一に，意味的に類似したモーダルな分析的形式間の弁別性，分析的形式間の結合現象について考察が必要である．第二に，朝鮮語の(広義の)モダリティー範疇におけるモーダルな分析的形式の役割が何であるかを解明しなければならない．

<<脚注>>

* 本稿は2014年6月に高麗大学校大学院国語国文学科に提出した博士学位論文である다카치(2014)の内容の一部について再考し修正および加筆したものである．

1) Huddleston & Pullum(2002: 178-179)では，英語の助動詞'can'が表す「能力」の意味は，拘束的モダリティー(deontic modality: Halliday & Matthiessen(2004)におけるモジュレーションの義務性に相当するもの)の「許可」の意味と比較した場合，話し手の主観的態度が完全に排除されるため，周辺的なモダリティーとして扱うべきであると主張されている．

2) Bybee et al.(1994)やAikhenvald(2004)の立場のように，証拠性(evidentiality)という用語を文法的手段とそれが表す意味に限定して使用するのか，それともBoye(2010)の立場のように，文法的手段とそれ以外の手段を区別せず，言及内容が事実であることを根拠付ける全ての言語的手段とそれらが表す意味を包括する用語として使用するのかについては，類型論の研究者間の合意が得られていない．

3) ただし，'Ⅱ-ㄹ래'のようなモーダルマーカーは疑問文において聞き手の「意志」を確認する用法で使用される．

<<参考文献>>

(朝鮮語で書かれたもの)

고영근(1986), 『국어학 신연구』, 탑출판사.

고영근(2007), 『한국어의 시제 서법 동작상(보정판)』, 태학사.

김진웅(2012), "한국어 증거성의 체계: 유형론을 중심으로", 『한국어 의미학』 제39호, 한국의미학회, pp. 101-124쪽.

다카치 토모나리(2014), "현대 한국어 문법적 연어의 양태체계 연구", 고려대학교 대학원 박사학위논문.

박재연(2006), 『한국어 양태 어미 연구』, 태학사.

박진호(2011), "한국어에서 증거성이나 의외성의 의미성분을 포함하는 문법요소", 『언어와 정보사회』, 서강대학교 언어정보연구소, pp. 1-25.

송재목(1998), "안맺은씨끝 '-더-'의 의미 기능에 대하여: 유형론적 관점에서", 『국어학』 제32호, 국어학회, pp. 135-169.

송재목(2009), "인식양태와 증거성", 『한국어학』 제44호, 한국어학회, pp. 27-53.

송재목(2011), "한국어 증거성표지의 중복실현", 『비교문화연구』 제22호, 경희대

학교 비교문화연구소, pp. 355-375.
장경희(1985), 『현대국어의 양태 범주 연구』, 탑출판사.
장경희(1995), "국어의 양태 범주의 설정과 그 체계", 『언어』 제20-3호, 한국언어학회, pp. 191-205.
서정수(1986), "국어의 서법", 『국어생활』 제7호, 국립국어원, pp. 116-130.
윤석민(2000), 『현대국어의 문장종결법 연구』, 집문당.
이선웅(2012), 『한국어 문법론의 개념에 연구』, 월인.
임동훈(2008), "한국어의 서법과 양태 체계", 『한국어 의미학』 26, 한국어의미학회, pp. 211-249.
조일영(1995), "국어 양태소의 의미기능 연구", 고려대학교 대학원 박사학위논문.

(英語で書かれたもの)

Aikhenvald, A. Y.(2004), *Evidentiality*. Oxford University Press.
Boye, K.(2010), Evidence for what? Evidentiality and scope, *STUF – Language Typology and Universals 63 No. 4*, pp. 290-307.
Bybee, J., Pagliuca, W., and Perkins, R.(1994), *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago University Press.
de Haan, F.(2005), Typological Approaches to Modality. In Frawley, W., ed., *Approaches to Modality*, pp. 27-69. Berlin: Mouton de Gruyter.
Halliday, M.A.K. and Matthiessen, Christian M.I.M.(2004), *An Introduction to Functional Grammar 3rd Ed*. London: Hodder Arnold.
Huddleston, R. and Pullum, G.(2002), *The Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
Kerans, K.(2000), *Semantics*. New York: Palgrave Macmillan.
Kim, J.(2012), *Korean Evidentials in Discourse*. Doctoral Dissertation. University of Texas at Austin.
Lee, J.(2011), The Korean evidential *–te*: A modal analysis, *Empirical Issues in Syntax and Semantics 8*. pp. 287-311.
Palmer, F. R.(2001), *Mood and Modality (2nd ed.)*. Cambridge: Cambridge University Press.
Wymann, A. R.(1996), *The expression of modality in Korean*. Ph.D. dissertation, Universität Bern, Bern.

<<言語資料>>

(書籍)

고득성(2009), 『돈 걱정 없는 노후 30년 가족재산 이야기』, 다산북스.
한만수(2011), 『마법의 소설 쓰기』, 한스앤리.

(ドラマシナリオ)

MBC(2007a), “하얀 거탑”

MBC(2007b), “커피프린스 1호점”

SBS(2011), “싸인 (드라마 대본)”

(コーパス)

문화체육관광부/국립국어원(2011), 『21세기 세종계획 최종 성과물 수정판(2쇄)』.

【謝辞】本稿は，筆者の博士論文の内容の一部に修正および加筆したものです．博士論文の提出後，朝鮮語のモダリティーについて再考した部分を反映しているため，細部に至っては博士論文の内容と異なりますが，本稿の根幹は博士論文の審査委員の諸先生方と議論した内容にあると言えます．また，2015年8月23日に神田外語学院で開催された「第1回朝鮮語及び周辺言語研究会」において，本稿について諸先生方から貴重なご意見を頂きました．さらに，神田外語大学韓国語研究会編集委員の諸先生方にはお忙しいにも関わらず，本稿の審査をなさって頂きました．この場をお借りして感謝申し上げます．そして，調査の段階で協力を惜しまなかった韓国人インフォーマントの諸氏に心から感謝致します．

A Foundamental Study on Modal Analytic Forms in Modern Korean

Tomonari TAKACHI
Woosong University

<Abstract>

The purpose of this paper is to describe modal systems represented by so-called "analytic forms' in Modern Korean.

First, we review literature regarding modal systems in Korean and discuss the terminologies 'mood' and 'modality'. According to recent typological researches, 'modality' is one of the cross-linguistic grammatical categories, possess by many languages. In the case of Korean, grammatical modal systems are represented by a part of pre-final and final endings. Several analytic forms also represent modal meanings like modal makers, however they are totally diferrent in terms of grammatical level. Basically modal analtic forms are composed of grammatical and lexical parts and they are tightly bound each other. In contrast, all of the modal makers are highly grammaticalized. Therefore, in this paper we use the terminology 'modalityness' to mean modal systems represented by modal analytic forms.

Second, we investigate the features of modal analytic forms in terms of syntactic and semantic views. We devide modal analytic forms into 4 groups, modalization, modulation, polysemic modal, and sub-modal, from their modal meanings. We also examine modal analytic forms with the criterion 'degrees of modality' which measure how each modal analytic forms are resembled to the modal makers from the viewpoint of syntactic and semantic features.

Key words: modal analytic forms, modality, modalityness, grammaticalization, degrees of modality